写

令和７年６月２３日

杉戸町議会議長
伊藤　美佐子　様

創　新
議席番号１１番　原田　壽々子

政務活動（視察）結果報告書

標記について、下記のとおり報告いたします。

１．視察日:　令和７年４月２３日（水）
　　令和７年４月２５日（金）

２．視察場所
　　東京ビッグサイトＥＤＩＸ　教育関連Ｓｅｍｉｎａｒ

３．視察目的
《これからの杉戸町らしさを見据えた教育の新たな可能性を探る》
　杉戸町は平成２２年をピークに少子高齢化が進み、令和に入り学校再編計画に基づく町立小・中学校の再編に着手しています。令和７年度は東中学校と広島中学校の統合により、新たに杉戸南中学校が誕生いたしました。世の中の少子化は国が７兆もの財源を投入しているのにもかかわらず、出生率は過去最低を記録いたしました。目に見えない形で、日本の教育における構造の歪みが出てくる一方で、教師の働き方改革、タブレット教育のさらなる推進による変革期が教育の質の低下にならないよう緊張感をもって取り組む必要があります。今回のセミナーは、教育をよりよいものにしたいと願う人たちが終結し、未来を紡ぐ新たな可能性の一歩になることを目的に３日間開催されました。参加することで、杉戸町が誰も取り残されることなく近未来教育が受けられる社会の実現の起点になることを目的に参加してまいりました。

４．参加セミナー
①４月２３日　１４：００～１５：００
　Ｊ－ＦＬＥＣによる小・中学校における金融経済教育
　＊Ｊ－ＦＬＥＣは金融庁の金融経済教育を推進するため法律に基づいて『２０２４年に設立され

た中立・公正な認可法人』金融経済教育を官民一体で行う機関で正式名称は金融経済教育推進機構。

出資団体：政府・日本銀行・全国銀行協会・日本証券業協会

②４月２５日　１１：００～１２：００

ＧＩＧＡ端末で考えを発信！川崎市立南河原小学校の６年生の授業参観

国語「かえりみち」➡ 一人一人が主語の学び

③４月２５日　１２：００～１３：００

教育現場をもっと良くするために～女性がもっと活躍できる学校とは？

リーダー育成のカギ

④４月２５日　１４：００～１５：００

先生の働き方をアップデートするために必要なこと、今でできること

⑤４月２５日　１５：００～１６：００

ホワイトマーカーで直接かける電子黒板がなぜ必要か

５．視察内容

①について

何を学ぶか～金融リテラシーマップということで、まず最低限身につけるべき金融リテラシ―の内容は「家計管理」「生活設計」「金融知識および金融経済事情の理解と適切な金融商品の利用選択」および「外部の知見の適切な活用」の４分野に分かれており、「金融リテラシ―マップ」はその内容を、年齢層別に体系的かつ具体的に記したもので**学習指導要領・同解説に示された教科等の内容に加え、各教科における発展的な学習や総合的な学習の時間および特別活動において実践されてきたものを含んでいる。**

今回金融広報中央委員会が、２０２３年に初めて実施した１５歳のお金と暮らしに関する知識・行動調査の概要の説明を受けた。

中学校の授業でお金（家計・くらし）について、「学んだ」との回答は５割。しかし、物価、リスクとリターン、複利の基本理解が十分でないことがうかがわれる。

２０２２年４月の成年年齢引き下げの事実は９４．８％が知っていると答えた。しかし、成人になるにあたって最低限必要となる『契約』に関する知識は、この段階では必ずしも身についていない。義務教育終了段階で最低限身に付けているべき金融リテラシ―が身についていない生徒が相当数いる。よって学校での金融教育の取組のさらなる強化を通じ、金融リテラシ―の全体的な底上げの必要がある。

中学校の授業で「学んだこと」と「教わったこと」との間にギャップが存在するため、経済政策、社会などマクロの学びと家計管理や生活設計を含む身近なお金や暮らしにかかるミクロの学びが、バランスよく展開されることが重要➡ではどの

ように学ぶか、学校現場における課題までの研修を受けた。

≪振り返り≫

文科省職員を始めかなりの教職員関係者１００名以上参加していた。私の隣席は文科省職員で、研修後にもいろんな話ができたのは大変有意義だった。

杉戸町では職員並びに教職員の金融リテラシ―の底上げも必要であり、児童生徒の金融リテラシ―教育が遅れをとることが無いよう早めの研修や公開授業に参加し、実践してほしい。

②について

先生１名３０代女性　児童２５名　教材：光村出版国語『かえりみち』

視点や作品の構成　に着目して読み、印象に残ったことを伝え合おう

【つけたい力】

１．登場人物の関係や心情を、描写をもとに捉える力

２．物語を読んでまとめた考えや印象に残ったことを共有することで「自分の考え」を広めたり深めたりする力

それぞれが、山場前後の心境の変化をタブレットに打ち込むとそれが、随時タイムリーにスクリーンに映し出され、先生が各生徒を訪ね歩きアドバイスをしている間も全員の作業状態が一目瞭然で確認できる状態であった。作業は自由で、いつの間にかタブレットを抱えて１３人くらいのグループがあったり、一人で作業している子、２人で作業している子まちまちであったが、すべて、先生の目が行き届いている状態での楽しい授業風景であり、誰一人違う作業をしている子どもはいなかった。その光景は２０分３０分と続いていた。

≪振り返り≫

使用する黒板の違いはかなり授業の質と教師の労力、それが児童あるいは生徒の習得する力の差にでるのではないかということ。

児童の作業中に「つなぐ」言葉をどれだけ発するかはかなり大事で、クラウド内で即時共有することで、旧態依然とした方法の児童全員をつなげるためのノートを提出させることを省くこともできる。振り返り考察の中で、教師の力量がためされるのは、共有させっぱなしはＮＧということ、すなわちヒントや軌道修正の舵取りが必須である点だという。

ＦｉｇＪａｍを使う子、イラストとメモで学ぶ子、表にまとめる子、いずれも共通点はしっかりマーカーを引きながら各々が教科書を読みこんでいること。正に児童が学びを創る➡従来のプリントを写すとか、ただ受け取るというものから、授業中に児童がさぼりにくくなったと話されていたことは印象的であった。

③について

広島県初代女性教育長になった平川理恵先生と、さいたま市で教育長をされていた細田眞由美先生のパネルディスカッション形式で行われた。

女性は元来リーダーになりたがらない傾向があるが、女性が活躍できる教育委員会にしていくこと、全体の２５％を目指していくくらいのプログレッシブさがないといけない。そのためには・・・云々。リーダー育成の鍵ということを中心に話は展開されていた。結局は男女というよりも、多様性を持った仲間を増やしていくこと（発想の違う人）。多様な意見を自由に話し合える組織づくりは女性が向いている。教育界によくあることが、子育てとの両立も含めて女性の敵は実は女性だったりする。しかし、それによって、本業とは違う力がつくと思って、力を蓄える、メンタルモデルを変えること。女性管理職が増えると、ワイセツ・セクハラは減る。育休のとり方は、校長のマネジメント力である。etc.

≪振り返り≫

会場は圧倒的になぜか男性が多かったように思う。２００人以上が参加していたが、結論的にはやはり、コンサバティブ傾向の市町村がいまだに多いことで、教育界の多様性はまだまだ低いという現実があることがわかった。男性はそもそも下駄があると思っている、その考えを一旦やめて下駄を脱いでみてと発信されていたことが印象的だった。

④について

「教育現場をもっとよくするために」ということで、ＳＮＳで現役教師の「しんどい」をたくさん聞いてきて見えてきたことと題して渡辺　友紀子氏。

現役９年目の主任教諭佐々木絵麻先生。そしてベネッセの教育担当の方がＭＣとなって展開された。こちらも文科省職員が多く参加されていて、ここでも隣席が文科省職員だったので、途中途中隣り通しのディスカッション時間もあり、現場の課題を聞くことができた。

【渡辺氏】

毎日多いときは５０件。先生方の「しんどい」相談を受ける。

何がそんなにしんどいのか➡教員を辞めたくないのに辞めざるを得ないと感じること

例）算数でやりたいことができなかった➡指導主事に学習規律ばかり言われた

母として、教員としても中途半端　➡我が子の顔、今日見たっけ？

学校内に話せる人や場所がない　➡学年研修のみ/私立はしっかりある。公立でなぜできない？

小学生というのは、親以外で、初めて働く大人を意識する段階。それだけにもっと教師の「しんどい」をたくさん話せる環境づくりが必須。

暖かさの鍵は「職員室」にある。女性教員の巣作りも昔と状況が違うから、もっと気軽に話せる雰囲気を作るべきで、働き方改革もいいが、働き甲斐改革をせよ。減らせ減らせの改革と同時に、増やす**働きがい改革**も大事。そして、出産するタイミングは、どちらかを犠牲にするのではなく、どちらも大切にする働き方を。妊娠中でも、子育て中でもキャリアアップが保証される環境や制度ができることが望ましい。

【佐々木主任教諭】

夏休みに教員が集まる教師道場を開設。腹筋強化と背筋伸ばしを取り入れ、職員室改革をやっているとのこと。その他、

☆運動会から、子どもらしさと交流の場ということで、スポーツフェアへ。

先生と保護者と一緒に競技したい　➡　こどもの意見

☆「授業命」と題し、４月中は２年生から６年生まですべて１週目は４時間

２周目以降は５時間とする➡じっくり子どもと向き合ってください

☆職員の伝達は共有文書で代替➡職員夕会の短縮➡教材研究の時間増

このような改革を通して、心の余裕が持てた。なぜか。職員室がワイワイアットホームになったことは大きい。

☆通知表は１０月と３月で所見は３月のみ

前期１０月は所見の代わりに個人面談で子どもたちの**良いところを伝え**る。

➡より詳しく伝えることができる➡後期の目標を**保護者と一緒に考えていく**ことができる

【ベネッセ教育総合研究所教育イノベーションセンター主任庄司氏の話】

教育委員会から研修依頼がある場合と校長先生から依頼と２つありますが、教育委員会からの依頼だと改革はうまく行きづらい。そして、アンケートだけは上手といった印象です。それは完全アウェイ状態になりやすいから。

しかし、校長先生からの依頼だと改革がうまく行きやすい。校長先生は「何かあったら責任取るよ」と職員に強いメッセージと共に、学校の当たり前をアップデートできます。教員の敵は社会ではなく教員だったりします。

ＤＸ化だけでアップデートしたことになるのか。も多くの学校が抱えています。

≪振り返り≫

この会場は教師も多く盛り上がっていた。しんどいな➡辞めればいいけど➡相談に来るという事は➡辞めたくない気持ちがある当町では対策や工夫、取組はどうなっているのかと気になるところ。

改革が進む学校　ＶＳ　多くの学校　について学ぶことができた。

昨今、急激に運動会の在り方が当町でも変化しているが、今一つ経緯などが知らされておらず、釈然としない部分も多くある。対話がもっと必要ではないかと感じた。

大分県玖珠（くす）町立塚脇小学校/沖縄県豊見城市立とよみ小学校/那覇市立松島小学校/京都府福知山市立桃映（とうえい）小学校/豊見城市立ゆたか小学校/和歌山県田辺市立田辺東部小学校/埼玉県戸田市立戸田東小学校/沖縄県浦添市立内間小学校/の情報管理システムの先進事例を覗くことができた。

⑤について　内容と振り返り

チョークの１本の時代は終わったといってもいいといえる、まるでアナログ？チョークと同じに見えるホワイトボードマーカーで直接かける電子黒板の説明を受けた。潤沢な財政の自治体の学校に通える子や働ける教員だけのものなのか。そんなことがあってはならないと思う。しっかりと当町でも教育のインフラ整備に尽力すべきと、忸怩たる思いで会場をあとにしました。

近隣市町の研究をすぐに進めてもらえたらと願う。

６．視察を終えて

今回は急に行くことになったこともあり、会派で行けなかったのが残念でしたが、実り多き２日間でした。ソフト面、ハード面ともに驚きや気づきが多かったです。当町でも、教員は研修だけではなく、大いにプログレッシブになって積極的な町の教育の推進を図っていただきたいです。